

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊36年目 **Nr. 414**

2024年9月号



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

147

福島第一原子力発電所で発生するALPS処理水の海洋放出が開始して、間もなく一年となる。一部の海外諸国による日本産水産物の輸入停止措置などを踏まえ、東京電力では、全国各地でのイベントや販売促進会、社内販売などを通じ、全社員・全グループが一丸となって国産水産物の消費拡大に取り組んでいる。一方、北海道では二〇二四年上半期の水産物輸出額が前年同期比で半減しており、依然として厳しい状況にある。

こうした中、同社はこのほど、東京・JR新橋駅前SL広場を中心に毎年開催される「新橋こいち祭り」に初めて出店した。七月二五、二六日の期間中（両日とも、一五時〜二〇時半）、「常磐もの」を使った「さんなまのポーポー焼き」（サンマのすり身に味噌と薬味を混ぜて団子にした漁師飯）や福島の酒を提供する「発見！ふくしま」の他、昨年一月にSL広場で行われた復興応援イベント「ホタテ祭り」でも盛況だった「ホタテ応援隊」のブースを設け、福島県・北海道の美味を振る舞った。

開催初日の二五日には小早川智明社長が応援に駆け付け、「ホタテ串焼き」の調理・販売に当たった。「ホタテ応援隊」のブースは、JR新橋駅日比谷口を出てすぐ、駅のコンコースにも香ばしさが漂う。一五時の開場後、小早川社長がブースに立った一六時半頃には、ホタテを求める来場者の列ができ、仕事帰りの人たちが繰り出す一九時半過ぎには既に売り切れとなる人気があった。



「ホタテ応援隊」のブースに立つ小早川社長
<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/24107.html>

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両地に生きる動物（その二）を紹介したい。プラター公園の中などでは、犬を散歩させている市民によく遭遇する。お互いリード（引き綱）を付けた犬たちが歩道で出会っても、吠えもしなければ、飛び掛りもせず、普通にすれ違う。市電やバスの中では、大きな犬は飼い主の足元にうずくまり、小型犬は飼い主の膝の上におとなしく座っている姿も微笑ましい。いずれも規則により口輪を付けている。レストランやカフェにも、飼い主と一緒に出かけたりマナーがよい。そして、そんな犬達に敵意のこもった眼差しを向ける人はまずいない。子供たちの態度も、犬に愛嬌が良かったり、恐怖心丸出しという子もいない。筆者が勤務した事務所の秘書もよくジャーマン・シェパードを職場に連れて来て、彼女の足下に行儀よく座らせていた。最初は真っ黒の巨体に驚いたが、おとなしいので直ぐ慣れて撫でて可愛がっていた。ウィーンは犬がいるのが当たり前の社会であり、人間社会に何気なく溶け込んで生活している犬の姿に愛着を覚える。およそ一四万頭の犬が飼われている。（*）

完了したALPS処理水の海洋放出については、「これれからもしっかりと安全を第一に進めていき、海域の放射能測定データを示していく」と述べた。会場内、C—形SLの脇に設置された温度計は三四°C。一七時頃からは小雨がぱらつきながらも、さらに賑わいを増し、「かみにみそ申焼き」、「うに貝焼」の他、福島特産の桃を用いたアイス「ふしぎなピーチバー」（竹内まりやのヒット曲に因んだ命名）など、様々な美味が食欲をそそった。同氏は、まず「食べてもらう」とこと強調し、今後を着実に応援していく姿勢を示した。

「新橋こいち祭り」は、バブル崩壊後の九〇年代半ば、新橋界隈に務めるサラリーマンらに『小一』時間楽しんでもらう』思いで地元商店会が始めたもの。近年では、若者連れも多く、二七回目となる今回は、二日間で約一四万人の来場者があった。

里でなく、ワンコ同伴OKのカフェや茶屋でも犬と遭遇することがある。例えば、神宮丸太町近くの鴨川河川敷に南北に広がる鴨川公園は、市街地の中にある貴重なリフレッシュ空間として老若男女を問わず多くの市民の憩いの場であり、朝夕には多くの愛犬家が犬を散歩させている。大体、決まった時間に顔なじみのグループが集まって、散歩の合間にさりげない会話や情報交換をしていることが多い。また、平安神宮前の大鳥居周辺にある岡崎公園や仁王門通りの犬との散歩は景色も良く、近くには歴史的建造物も数多くあり四季折々の景色を楽しめる。神社や寺院によってはペットの同伴を禁止（または制限）している施設・エリアもあるが、例えば、紅葉の名所として名高い南禅寺境内などのように、多くはリード着用により犬と一緒に散歩が可能である。ただし、ウィーンと違って京都市の地下鉄やバスは犬の同伴は、ケースに入れた小型犬か補助犬以外は禁止となっている。人口比ではウィーンとほぼ同程度のおよそ二万頭の犬がペットとして飼われている。



プラター公園中の公共ドッグゾーン

余談であるが、ウィーン勤務時に秘書が連れて来たジャーマン・シェパードは、定期的に訓練に参加していると聞いていたのを思い出す。京都ではマンションで雌のチワワを飼っていたが、犬にしては珍しく散歩が嫌いだだったので、偶にしか鴨川公園に連れて行かなかった。今月も両地に生きる動物を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン



■ 杉本純 元京都大学教授
 ■ 元原子力機構ウィーン事務所長

*参考ブログ：「ウィーン在住のトレーナーさんに聞く犬事情」